



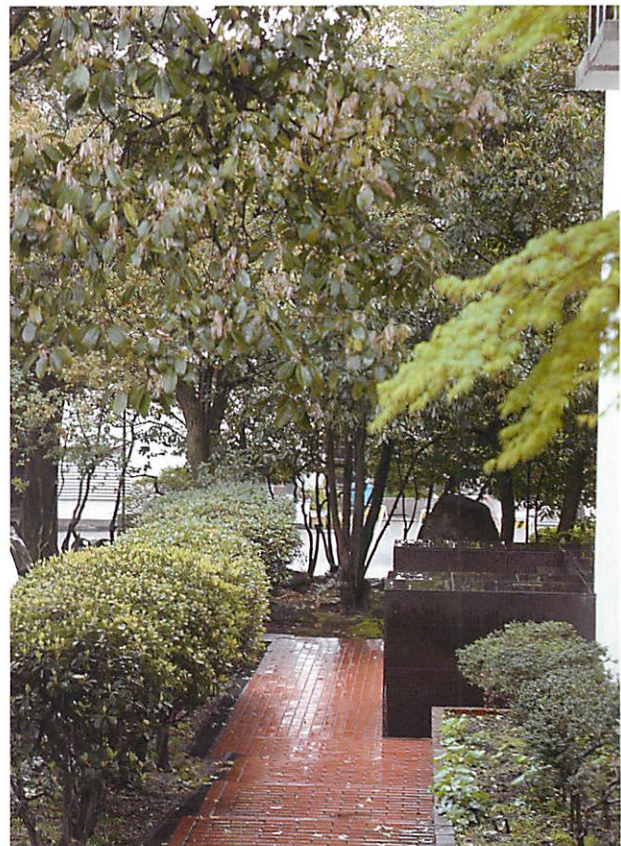
# ARGONAUTES

## 別府大学図書館報

アルゴノート No.48

### CONTENTS

豊後佐伯藩と佐伯文庫.....	豊田 寛三
別府大学「西洋古典学文庫」の可能性 佐藤文庫、秀村文庫、馬場文庫そして...	山本 晴樹
「なにもそこまで・・・」の文学 — アメリカ南部文学と僕 —	山野 敬士
大学の歴史を調べていく中で.....	吉岡 義信
わが著書を語る.....	白峰 旬 矢澤 信雄



# 豊後佐伯藩と佐伯文庫

豊田 寛三

## 「佐伯藩史料」の刊行

佐伯市教育委員会による「佐伯藩史料 温故知新録一」が刊行されたのは1996年3月であるから、事業はまもなく20年になる。「温故知新録」は19世紀始めの佐伯藩家老であった関谷長熙が文化年間から最終的には文政3年(1820)までの期日を要して同藩の古記録等を収集・編集したものであり、現在75巻(81冊)が写本として残っている。「佐伯藩史料 温故知新録」は当初は、年1冊刊行していたが、3巻以降は2年に1巻刊行としている(10巻まで刊行済)。本史料集には、慶長・元和期の文書を取録した「古御書写」をはじめ、元禄以降の歴代の「日記」や「諸御役人姓名書」「御法事帳写」「柳宮捧秩録」などを取録し、附録として佐伯城や領内・城下の絵図等を附している。

一般的な「史料集」は、解題と文献の翻刻及び読解を進めるための若干の注記等を施すのが通例である。そのことは、研究史料の学界共有化という視点からも大きな意義のある事業である。筆者もこれまでにかなりの史料集の刊行に携わってきた。

「佐伯藩史料」の刊行事業開始にあたって、事務局から、要望が出された。市民の立場にたつと、史料の翻刻だけでは、読みにくい。なんとか、現代語訳(解釈)をつけて欲しいというものだった。しかし、それは、難問であった。史料の解釈、つまり一文・一語をどう解釈し、位置づけるかは、研究者の歴史観の反映であり、それこそ実力が試されるのである。簡単な例をあげよう。現在「自由」という語は、英語のフリーダムと同意である。しかし、前近代においては、「自由」は「わがまま、勝手」の意であった。それをまちがって解釈すると、歴史でなくなる。

しかし、史料の共有財産化は一般市民も対象とすべきだ、との事務局の要望も理解できる。だから、困ってしまった。一緒に引き受けた橋本操六氏(元、大分県史編纂班参事)と相談して、結局は各記事に「大意」を付けることで納得していただいた。

具体的に作業を進めていった。2巻までは、橋本氏との共同作業であり、相互の疑問点は突合せを行い、解題などは筆者が執筆した。想定どおり困難な仕事ではあったが、切り抜けてきた。しかし、筆者が勤務先の公務に追われることになり、3巻(99年3月刊)から6巻(05年3月刊)までは、面倒な仕事は橋本氏に任さざるをえず、最終的な詰めに協力するという状況だった。

2004年にいたって、橋本氏が高齢を理由に退かれ、仕事は全面的に筆者に降りかかってきた。7巻から10巻の編集・解題・解説・大意の記述を事務局の援助を受けながら、ひとり作業を行い、現在11巻の編集集中である。江戸藩邸の役割や仕事、大名家の行事の様子など、筆者の不案内のことなども多く、大変苦労している。

2004年にいたって、橋本氏が高齢を理由に退かれ、仕事は全面的に筆者に降りかかってきた。7巻から10巻の編集・解題・解説・大意の記述を事務局の援助を受けながら、ひとり作業を行い、現在11巻の編集集中である。江戸藩邸の役割や仕事、大名家の行事の様子など、筆者の不案内のことなども多く、大変苦労している。

## 佐伯藩8代藩主毛利高標

さて、第1巻の「刊行によせて」で筆者は次のように記している。筆者が佐伯藩藩政文書との出会いが昭和51年であること、3594点の文書の整理・目録(「佐伯藩政史料目録」)の作成や「温故知新録」との出会い、藩政史料の量と質の高さを述べ、「八代藩主毛利高標(たかすえ)」によって集書され、俗に八万巻といわれる佐伯文庫を保有した佐伯藩ならば

こそ、という感想を抱いた。」としている。

近世の佐伯藩を語る時、最も知られているのは佐伯文庫であろう。その集書を命じ、鳥取藩主池田定常、近江仁正寺藩主市橋長昭と並んで「学者三大名」と称されたのが、毛利高標だった。

高標は、宝暦5年(1755)11月9日に藩主高丘と正室(下野壬生城主烏居忠意の妹)との次男として生まれ、幼名を彦三郎と称した。高丘と正室の婚姻は、宝暦2年12月に行われているが、翌3年正月には高丘と側室(佐原氏)との間に、男子(土之助、後の花房正応)が誕生している。

高丘と正室の間には、宝暦4年2月に長男(秀太郎)が生まれている。しかし、秀太郎は、初誕生を終えた5年4月に急死している。嫡男の死によって毛利家は混乱する。

国許に帰し、「虚弱」であるとして幕府に誕生を届けてなかった土之助を本姓(森→毛利)に戻し、幕府に届出、3歳であったものを6歳としている。秀太郎の死によって、土之助には家督相続の可能性が出たためであろう。

藩主高丘は宝暦5年は帰国年であり、その準備をしていた折、正室の懐妊が判明した。留守中の同年11月に生まれたのが、彦三郎(高標)だった。父との初対面は、6年4月だった。彦三郎はこの年11月には初めて表へ出ており、祝儀として太刀・馬代等が献上され、祝いが行われている。藩政へのデビューとでもいうべきか。

しかし、宝暦10年6月、藩主高丘はわずか33歳で逝去した。彦三郎は、同年8月、6歳で父の遺領を継ぎ、明和8年(1771)7月將軍に拝謁し、初国入りの許可を得ている。翌安永元年(1772)には和泉守、同4年には18歳で伊予大洲藩主加藤泰武の妹と婚姻し、寛政元年(1789)には伊勢守に叙任している。高標は、享和元年(1801)8月、48歳で死去するが藩主の地位にあること、40年以上であった。

## 毛利高標と佐伯文庫

さて、高標は、生来学問好きであった。安永5年(1776)には、城内に藩校「四教堂」を設置し、矢野黙齋らによる藩士の子弟の教育機関とした。今、佐伯城三ノ丸櫓門前に位置する佐伯小学校には四教堂の扁額が掲げられている。この四教堂教授に日田から松下西洋を招いている。松下は、元久留米藩士であったが、訳あって日田に來、廣瀬淡窓をして「松下先生ノ門ニ入り、始テ詩ヲ学フ」「松下我郷ニ在ルコト前後五年、予カ随從セシ間ハ三年餘ナリ、其間一日モ親炙セサルコトナシ、是ニ於テ師ヲ失ヘリ」と言わしめた、まさに恩師ともいうべき人物である(「懐旧樓筆記」)。寛政7年(1795)春、14歳の淡窓は、佐伯の松下西洋のもとに遊学し、約4ヶ月留まっている。

天明元年(1781)城内に3棟の書物倉を建設し、書庫ならびに御書物奉行所を置き、蒐集した書物を保管した。佐伯文庫の始まりである。その大部分は漢籍(宋・元・明・清)であり、四書五経をはじめ、史書・詩文・仏典・医書・数学・天文・生物学など幅広く、また初版本など質の高いものばかりが選り抜かれていた。また、オランダ語やフランス語の植物書や医書・世界地図など、西洋の本も含まれていた。

集書のために、長崎に派遣していた家臣への書簡の一部を紹介しよう(「大分県人物志」)。

一、淮南子、蔵本に引合せ候処、朱評同様に候間、不用に

候、見せ本並便に返し候、天市（長崎の書肆）へ其段申付け、相渡し可申候、尤書物出候度に、見せ本取寄せ相送り可申候

（淮南子は所蔵本に照合したところ、朱子の評注のものと同じだから不要である。見本本を普通便で返却するから、天市にそのことを申し、返すように。ただし、新規に書物が出るたびに見本本を取寄せ、送ってくるように。）

- 一、勸善書、右は唐本にて候哉、又は写本にて候や、写本にて候は、用事無之、唐本にて候は、蔵書に申付候間、全部八日便を以て、平野茂助・梅田伝八郎方迄、差越可申候、前書に後漢書唐本ならば見せ本一冊可差越様認め候へ共、通例の唐本なると申計の事にて候は、見せ本にてても不及送候

（勸善書は唐本か、それとも写本か、写本ならば必要ない。唐本ならば、八日の便で全巻を平野・梅田の許まで送るように。前の書状で、後漢書が唐本ならば、見せ本を一冊送るように書いたが、普通の唐本だけというならば、見せ本も必要ない）

- 一、（略）朝鮮本何品に不寄、見当次第可申越、書林共にも右之趣可申付候、梶川七兵衛には申付候に不及候、石摺類珍敷ものは申越可申候、有ふれの品は、夫に不及候（後略）

（朝鮮本は何であろうとも見つけ次第言ってくるように。そのことは、書肆にも言うておくように。梶川には申し付ける必要はない。石摺りの珍しいものは言うて来るように。ありふれた品はその必要はない。）

これを読んだだけで、高標の書籍に関する知識・鑑識眼が正確で豊かなものであり、集書にかける情熱が並ではないことが理解できるだろう。

彼は、愛書家でもあった。江戸から書物奉行への書状では、「樟脳沢山入れ可被下候」と虫害を防ぐために防虫剤を沢山入れ、「隔日程に出し御改可被下候、尤取扱随分入念可被下候」と手入れにも気を配っている。藩主が家臣にたいして「可被下候」という文言も注目する必要がある。万一の火災に備えて蔵書は、すべて櫃に納められ、櫃の両側には頑丈な錠が付けられ、いつでも担いで持ち出せるようにしていたという。

また、高標は、家臣にも蔵書を貸し出し、利用が少ないと不機嫌になったとも言われている。単なる死蔵家ではなかった。

#### 佐伯藩 書物奉行 明石大助（秋室）

明石大助は、寛政5年（1793）、杵築藩士豊田八蔵の二男に生まれ、藩校教授の三浦黄鶴（梅園の子）に学び、「博覧該通」といわれた（以下の記述は『大分県人物志』による）。

大助は、文化9年（1812）日田の咸宜園に廣瀬淡窓を訪ねた。淡窓は明石を客分として迎え、3、40日滞在した。

佐伯藩の明石家から養子の話があった。その時の答えは「僻隅の小藩、予が意に充たずと雖も、嘗て聞く該藩（佐伯）は天下の奇書に富むと、若し予をして史書監督の任に当らしめば応諾せん」というものだった。要するに、佐伯文庫の監督をさせるならば、明石家に養子に入るといふもので、ある意味では、佐伯藩や明石家にとっては、失礼とも言うべき返答であった。

当時の佐伯藩主は、高標の孫高翰（たかなか）だった。高翰は「冀望（きぼう）に任すべし」と命じたという。そこで、大助は佐伯に入り、明石家を継ぎ、文政3年（1820）には希望通り書物奉行となった。彼の勤めぶりには「書庫充棟の群書を渉獵し、蕙蓄更に幾倍の深きを加へ」「沈毅寡慾、超然として時流に阿らず、書物奉行の外なほ郡奉行の職を奉じたるも、公務を執るの他は、（略）更に俗事を顧ることなし」というものだった。そのため、当時の人は、彼を「奇人」と称したという。明石大助は慶応元年（1865）73歳で死去した。

#### 佐伯文庫の行方と現状

毛利高標の集書した佐伯文庫は今、どうなっているのか？文政7年（1824）高標の孫10代藩主毛利高翰の時、2万巻余が江戸幕府に献上された。なぜ、幕府に献上したか？については古来諸説がある。現在、一般的に言われているのは、佐伯藩領内に囲まれてある幕府領2000石（床木・堅田地区、かつては佐伯藩領であり、当時は佐伯藩預かり地だった）の返還を求めてのものだったという。献上書物の目録を作成したのは明石大助だった。また、廣瀬淡窓によって「余、人ヲ教ヘシヨリ以来、人才此人ヲ以テ第一トス」と評された中島玉子は、献本を残念がったが、友人篠崎小竹の、「佐伯藩より幕府にあるほうが、保管が厳重でかえって良い」という説得を受けたという。

幕府に献上された佐伯文庫の書物は、宮内庁書陵部、国立公文書館、内閣文庫、国立国会図書館に保管されている。また、佐伯に残されたものは、現在大分県立図書館や佐伯市立図書館などに所蔵されている。いずれにしても今も尚、漢籍のコレクションとしては世界有数のものであるといわれている。

（参考文献『大分県史 近世篇Ⅳ』『大分歴史事典』（別府大学 学長）

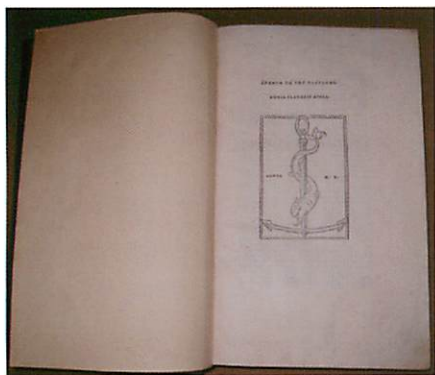
## 別府大学「西洋古典学文庫」の可能性 佐藤文庫、秀村文庫、馬場文庫そして...

山本晴樹

「西洋古典文庫をつくりたい」というのが、佐藤義詮さん（1906 - 87）（「さん」づけで恐縮ですが、これが一番しっくりきます）の晩年の口癖だった。そういわれるだけあって、義詮さんの蔵書はなかなかのものである。とりわけ現在本館5階の書庫にある、ギリシア・ラテンの稀覯本は大変価値がある。めったに見られないが、たまに手に取ってみると

ネサンス時代の16世紀に印刷された本である。一般に「アルドゥス版」といわれるもので、碇にイルカがまわりついている図柄で有名である（写真①）。碇は沈着・冷静を表し、イルカは敏捷を表している。この意味するところは「ゆっくり急げ（Festina lente）」である。（この言葉はスエトニウスの「ローマ皇帝伝」によれば、初代皇帝アウグストゥス

の座右の銘でもあった。カエサルとは異なる一面がよく出ている言葉である)。少し前ドイツではゲーテンベルクがおり、彼とイタリア・ヴェネツィアのアルドゥスは並び称されるルネサンス時代の印刷業者だった。本学に所蔵されてい



写真① アルドゥス版

るのはそのアルドゥス版のプラトン全集、その他の版のアリストテレス全集やキケロ、セネカ全集などである。このような貴重な本が本学にあること自体驚きであり、もっと宣伝してもよいのではないかと思っている。義詮さんはとにかくギリシア・ラテン文学に造詣が深く、その関連の叢書を多く集められた。原文対訳の英語版として有名なイギリスのロエブ文庫もある。また、ドイツのこれまた有名な古代学辞典(RE)も所蔵されており、今を去る30数年前、本学に赴任した筆者などは、その充実したコレクションに度肝を抜かれたものである(その割に利用率が今ひとつ、といわれれば慚愧の至りである)。和書・洋書・漢籍と多方面に関心のあった義詮さんの文庫は総称して「杳極亭(ようきょくてい)文庫」(「杳極」とは茫洋としていてとらえどころがないという意味らしいですが、義詮さんにピッタリです)と呼ばれているが、西洋古典学関連の書物だけでも立派な文庫になる。

「秀村文庫」は東京大学文学部西洋史学科で長年西洋古代史を教えられた秀村欣二先生(1912 - 97)の蔵書である。池口守先生が本学在職中に、先年亡くなられた森本芳樹先生(日本が誇る西洋中世史家)から勧められ、別府大学が2009年に引き取ったものである。秀村先生が亡くなられてだいぶたっていたが、遺族の方々は蔵書がバラバラになってしまうのを惜しんで、そのままにされていた。しかし、東京の成城(かつて野上弥生子が住み、現在は大江健三郎が住む文化人の地区)の家を改築しなければならなくなり、蔵書の引き取り先を探されていた。そんな中、別府大学が引き取ることになったのである。蔵書の運搬費を負担してもらえば結構という、破格の申し出だった。ちょうど本学2号館の書庫が空いている絶好の機会だったので、そこに運び入れることにした。全部で約一万冊である。運び込む作業は壮観だった。現在、前館長の石井保廣先生のご努力で8割方整理がついている。もう一息である。秀村先生のご遺族も気がかりだったのか、その後一度秀村選三先生(実弟、日本経済史家)を含めて総勢



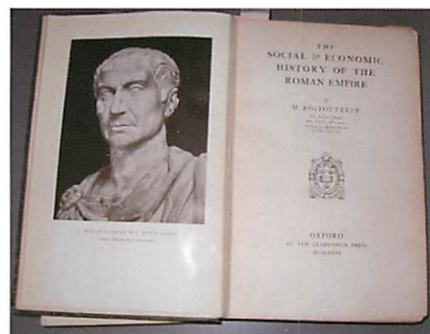
写真② 秀村文庫見学

10名で九州観光を兼ねて様子を見に来られた(写真②)。

筆者はことあるごとにこの書庫に潜り込んで借り出しているが、現在読んでいるのは、

高橋三郎著『マタイ福音書講義』全三巻(1990～1993年)である。福音書といえば、学生時代に大学の図書館で偶然、田川健三という人の『批判的主体の形成』(三一書房、1971年、なんとこの本は40年前に出版されたのに絶版になっていない。いかに読み継がれてきたかである)を読んで以来、その激越な批判精神に打ちのめされ、「田川教徒」になってしまい、一時彼の本を読みあさった記憶がある。そのなかでも『マルコ福音書(上)』(新教出版社、1972年)は注解としては秀逸で、「原典を読む」とはこういうことかと感じ入ったものだった。このようなわけで、福音書の注解には関心があり、秀村文庫でも高橋さんの本を見つけて、現在三巻目を読んでいるところである。ギリシア語原文を踏まえながら、マタイ福音書をマルコ福音書やルカ福音書と比較対照させているので、原始キリスト教の原型(プロトタイプ)がわかり、大変勉強になる。筆者の研究対象であるローマ元首政の開始時期にあたるので、その面からも参考になる。「秀村文庫」にはこのようにヘレニズム時代そして原始キリスト教時代の文献が豊富にそろっている。

「馬場文庫」は本学大学院文学研究科の初代研究科長をされた馬場典明教授の蔵書である。馬場先生は長年ローマ史を研究され、とりわけローマ時代の社会経済史(ローマ大土地所有制)で学位をとられた。ローマ大土地所有制といえば、日本が生んだ世界的西洋古代史家村川堅太郎氏が有名であるが、村川先生の本は第二次世界大戦終結後の1949年に出版されているのではや絶版である。この村川先生の業績を半世紀ぶりに書き換えたのが馬場先生だった。馬場先生は筆者の恩師であり、70歳で定年退職された後、福岡の自宅におられるが、数年前80歳になられたとき、後進のために役立たせたいとして、2012年に本学に蔵書を寄贈された。この文庫も現在2号館にある。馬場先生の専門を反映して、ローマ社会経済史に関する文献が実に豊富である。とりわけ重要なものは、ミハエル・ロストフツェフ(1870 - 1952)の『ローマ社会経済史』初版(1926年)である(写真③)。ロストフツェフは名前からもわかるようにロシア人で、帝政ロシア末期に生まれロシア革命で亡命を余儀なくされた。その経験が彼のローマ史研究には反映しているともいわれるが、彼の著作はローマ社会経済史の古典である。とりわけ初版は重要で、現在よく参照される第二版(1957年)とは若干異なっているといわれているので、その意味でもこの本の存在意義がある。ロストフツェフは馬場先生にも多大の影響を与えており、先生の論文のそこかしこにそれを読み



写真③ ロストフツェフ『ローマ社会経済史』初版(1926年) 左頁はカエサル像

とることができる。このように、「馬場文庫」はおそらくローマ社会経済史に関しては日本有数の文庫だろう。

そして、最後に付け加えたいのは、手前みそになるが筆者がこれまで30数年間に集めた書籍である。今後も価値があると思われるは、なんと言っても『ラテン碑文集成(CIL)』である。19世紀のドイツの古代史学界が総力をあげて収集したもので、なんと現在もお編纂されつづけている。その持続力には舌を巻くが、ローマ時代の碑文研究を行なう上で



の基本文献である。これを全巻所蔵している図書館は日本では稀であろう。これとともに挙げておきたいのが、義詮さんの集められた「ロエブ文庫」と並ぶギリシア・ラテン古典文庫であるフランスの「ブデ文庫」(原文とフランス語の対訳)とドイツの「トイブナー文庫」(厳密な原文校訂で知られている)である。これで、ヨーロッパの三大ギリシア・ラテン古典文庫がそろったことになる。

こうしてみると、別府大学にはギリシア・ラテンの古典文庫である「佐藤文庫」と、ギリシア・ヘレニズム史および原

始キリスト教史の「秀村文庫」、そしてローマ社会経済史の「馬場文庫」が存在していることになる。それに、その他のローマ史関係の所蔵書籍を加えれば優に「西洋古典学文庫」と呼べるものができそうである。義詮さんの目指された「西洋古典学文庫」とはすこし異なるが、内容からすればどこへ出しても恥ずかしくないと思われるので、「西洋古典学文庫」は義詮さんにも恐らく許してもらえるのでは無かろうか。

(文学部 史学・文化財学科教授)

## 「なにもそこまで・・・」の文学 — アメリカ南部文学と僕 —

山野 敬 士

初めて読んだアメリカ南部文学は(もちろん「南部文学」などと意識してなかったが)、『トム・ソーヤの冒険』や『ハックルベリー・フィンの冒険』で、そのとき僕は小学校4年生だった。陽気な二人のやんちゃくれは実は全く異なる類の人間で、社会制度や道徳観を理解した上でそれに反抗するトムに対し、ハックはそのようなものが認識できない。悪いことばかりしていても善悪の区別がつくトムはきっといつかは社会に帰還できるはずなのだが、善悪の区別さえもよくわからないハックはどうやっても安住の場所を見つけることができないのだ。『ハックルベリー』の結末で、自分を受け入れてくれる家や共同体があることを知ったハックは、「ごめんだよ、そんなの」とインディアン集落の方に旅立ってしまう。僕は読んでいて悲しくなった。「この子はいったいどうなるんじやろう」と涙が出た。ハックが倫理的な行動を本能的に取れる分よけいに悲しかった。「なにもそこまで・・・」と溜息が出た。彼は過度に自由なのだ。「自由を求める少年の心」などという安易な言葉が吹き飛ぶほどハックは「行きすぎて」突き抜けている」少年だった。

中学生になって、南部文学といえば一般的に最初に名前が挙がる『風と共に去りぬ』を読んだ。これが退屈だった。南北戦争という歴史的事実を知ることが出来たのは良かったし、主人公スカーレット・オハラに思春期的好意を寄せたりもしたが、例の「突き抜けている」感覚が持てなかった。そんなわけで、「アメリカ南部」を意識するようになった原因は音楽だった。ローリング・ストーンズを好きになって、そこから彼らのルーツであるブルースに夢中になってしまった。一番のヒーローは1930年代にミシシッピ・デルタ地帯に君臨したロバート・ジョンソンだった。「悪魔に魂を売ってギターの才能を得た」「酒が好物だが、それ以上に他人の恋人や妻を寝取るのが好きでそれが原因で毒殺された」という「なにもそこまで」的ジョンソンの逸話は、「これ一人でひいてるのか」と思わずにはいられない超絶的ギターテクニクと、古いけど良く切れるナイフのような歌声によって僕の頭の中で具現化した。残念ながら才能が全くないため音楽方面に歩を進めることは思いつきもせず、割と自然に「ジョンソンが生まれ、歌い、そして殺された土地」、つまりアメリカ南部に興味を持つようになった。ブルースの演奏は出来なくても「ブルースが鳴っている場所や文学」に触れていれば十分幸せだろうと考えたわけである。

大学に進学すると、幸いなことにアメリカ文学担当教員の

専門が「南部文学」で、授業内外で南部文学を夢中になって読むようになった。ウィリアム・フォークナー、トマス・ウルフ、カーソン・マッカーズ、フラナリー・オコナー、テネシー・ウィリアムズ・・・そのような作家の作品を読むと頭の中でブルースが鳴った。フォークナーならカントリー・ブルース、ウィリアムズならブルーノートのピアノといった具合に。逆にブルースを聴くと、頭の中に小説や演劇の登場人物が出てきてじっとこちらを見つめていたり印象的な台詞を言ったりすることがあった。ジョンソンのスライドギターを聴いているとフォークナー作品の黒人登場人物達の遠景が見えた。ゴスペルっぽい曲を聴いているとオコナーの登場人物が現れて奇妙な宗教的言葉を語りかけてきたりした。

南部文学の主題というものを考えてみると、家系、家族、伝統等に対する異様な執着や人生に対する強い罪悪感が挙がるだろう。こんなものはどの国の文学であっても主題の一つとして機能しているのだが、南部文学ではそれらが特に顕著に表現されていると僕は思う。特に、南北戦争で敗北したために消え去ってしまった「古い南部」の価値観や道徳観に、それらが存在しないと十分に理解しながらも、すがって生きることを止めない登場人物達の姿に強く惹かれた。再び「なにもそこまで」の感覚だった。彼らは現代的視点から言うと非常に効率の悪い生き方をしているわけだが、彼らが持つ「過度な」ノスタルジーは僕にとっては奇妙に美しいものだったし、そのノスタルジーを開き直すこともせず罪悪感を持って抱きしめている姿には悲しみと滑稽さが同居していて、まさしく「突き抜けている」雰囲気があり、それは非現実的にも「内側に突き抜けている」印象があった。

この主題を最も印象的に表現した作家は、「南部文学の創始者」と呼ばれるウィリアム・フォークナーだろう。『響きと怒り』や『アブサロム、アブサロム!』は新旧南部の対立を中心に据えた大傑作だが、僕の永遠のお気に入りには短編小説「エミリーのバラ」だ。北部出身の恋人がいたにもかかわらず、「古い南部」を象徴する貴族階級としての自我を捨て切れなかった一人の女性(エミリー・グリアソン)が取った奇怪な行動(これこそアメリカ南部文学史上最大の「なにもそこまで・・・」だろう)が、小説の結末で明らかになるとき、それは考えたくないほど残忍で吐き気を催すほどグロテスクなものなのだが、不思議にも文章からは強烈な悲しさと静かな美しさ、そしてわずかな滑稽さがゆっくりと立ちこめ、何とも芳しい香りが漂ってくる。もちろんブルースの調

べとともに。

暴力が頻繁に描かれることも南部文学の特徴だ。まず、南部は奴隷制度を容認した地域なので人種差別の問題が暴力的に描かれることが多い。また、男尊女卑の時代が他の地域に比べ長かったため女性に対する暴力が咎められることなく描かれることも指摘されるだろう。ここでもチャンピオンはフォークナーだ。『八月の光』の中では、黒人の血が1/8だけ流れている主人公ジョー・クリスマスが、町の住民から「黒人」と見なされ、追跡され集団暴行を受け殺害される。『サンクチュアリ』においては、「こんな悪い人間がいるのか」としか言えない登場人物ボバイが女子大学生に性的暴力を加えるが、その方法ときたら、「なにもそこまで」と言うのも嫌になるほど常軌を逸しており、読むたびに目の前が暗くなり、胸の奥からのど元にかけて嫌悪の塊が湧きあがる。

一言で言うと、『八月の光』や『サンクチュアリ』には「人間が認めたくない人間の本質」が提示されているのだと思う。それらには、「人間だもの・・・とか言って、ぺろっと舌を出しときゃO.K.っすよね」的な「だらしなさの安易な共有」に至る道はない。それらは、読んだことや物語に興味を持ったことに罪の意識を読者が抱かざるを得ないやり方で、強烈に「人間の邪悪な姿」を突き付ける作品達なのであり、それこそ罪の意識とともに告白すると、僕はそんな感じが好きなのだ。ブルースが鳴るのだ、そんな感じの作品を読んでいる。僕は人間のネガティブな側面を安易な妥協で計測したくない。せめてフィクションの中では底の見えない人間の邪悪さを見つめていたい。何の根拠もないが、それが正しい人間の姿に気づく一つの道だとも信じているのである。

フラナリー・オコナーの作品も暴力が強調されている。ジョージア州の片田舎で隠遁生活を送った物静かな女性を書いたとは信じ難い暴力シーンが列を為して攻めてくる。その強烈さはフォークナーをも凌駕するかもしれない。人種や性別などの社会的事象に原因を求めることが可能なフォークナーの暴力に対し、オコナーのそれは無差別的だからだ。短編小説「善人はなかなかいない」では、愛すべき性格の善良な老婦人が家族と出かけたドライブ旅行の途中、脱獄囚に遭遇し殺害される。「善良な田舎者」では、読者も主人公もただの善良な田舎者と思っていた男が、作品の最後に悪魔のような本性を剥き出し、身体不自由な女性に襲いかかる。それらの作品を読む人は、「なんでこの人が?」「なんでこんなやり方で?」「なにもそこまでやらんでも」と釈然としない感覚に苛まれるだろう。そこには作者オコナーのキリスト教的宗教感覚が存在すると言われる。オコナー作品の中では、どんなに善良な人間であってもあらゆる暴力に値する生まれながらの罪=原罪を持っているのだ。そして、救いは安易には訪れない。救いは最も狭き門を通り最大の犠牲を払ってのみ獲得され、それは現実的に言うと、「簡単な救いが存在しないことが人生における唯一の救い」としか表現できないような性質のものなのである。

キリスト教的「罪の意識」を性意識に転化した作家が存在することも南部文学の特徴である。清教徒（ピューリタン）が建国したアメリカという国では「性的な意識」が罪深いこととして認識される傾向がもともと強いが、それはバイブル



ベルトに位置する南部では極端に強調される。特に女性や同性愛者の性意識は罪深いものとして提示される。この主題はフォークナーによって創造され、その影響を受けた劇作家テネシー・ウィリアムズの演劇やその映画化を通して全世界に広まった。性意識を持つことはそれこそ健全な人間の営みなのであるが、そこに「なにもそこまで」的罪悪感が付与されることで、感受性が強く尋常でない「生きづらさ」を常に感じている登場人物達が不思議な光を放ち、彼らの所謂「内側に突き抜けている」人物像はブルースを奏で始めるのである。

ウィリアムズ演劇の最大の特徴は（僕はもう30年近くもそれに夢中になっているのだが）、台詞が詩的で、音楽的で、本当に美しいことだ。内容の異常さと台詞の美しさは、なぜか乖離せず一体となって読者や観客を引き付ける。抑揚が激しく、母音が異常に引き伸ばされる南部方言はただ聞くだけでも楽しいものであるが、話し言葉で構成される演劇はそれを最大限に活用できる芸術形態なのだろう。もし興味を持った方がおられたら、ウィリアムズ作品だけは英語で読んで（できれば音読をしながら）頂きたいと思う。

最後に一人の現代作家を御紹介しよう。コーマック・マッカーシーである。彼こそが生存している最強の南部作家だろう。一般的に評価されるようになった『すべての美しい馬』以降の作品はテキサスからメキシコ国境周辺を舞台にすることが多いので、南部作家と認められない傾向もあるが、少なくとも、彼がフォークナーやオコナーの系譜に位置していることは間違いないし、また、南部作家ではない巨大な作家（例えば、メルヴィルやヘミングウェイ）の影も感じられる点で、極めて重要な作家である。マッカーシーの本質は、実は『すべての美しい馬』以前の、テネシー州山間部を舞台にしたグロテスクな物語群にある。『チャイルド・オブ・ゴッド』という作品のみが日本語に訳されているが、内容は言葉では表現できないほどグロテスクだ。正直「こりゃひどいな」と思う。しかし何故か何度も読んでしまう。罪悪感とともに宣言してみるが、アメリカ現代文学最高傑作だと思う。

ここ10年くらい「マッカーシーがノーベル文学賞を取るのでは」と言われてきた。僕は「取れない」と思うし、「取らない」で欲しい。ノーベル賞なんてその程度のものだ。安易な人間賛成に落ち着くような解釈を簡単に下せないところがマッカーシーの魅力であり、その意味で、彼は僕がずっと虜になっている南部文学の正当な継承者なのである。

つらつらと、思いつくままに「アメリカ南部文学の魅力」について述べてきたが（おそらく読んでいる皆さんにとっては「魅力も何もあったもんじゃない」だろうが）、要するに僕にとっての南部文学最大の魅力は、「なにもそこまで」の感覚をより強く感じさせてくれる点にある。実社会では、「なにもそこまで」的人間にはなかなかお目にかかれないし、幸運にも「突き抜けている」彼らに会えた（大学は他の場所より連中に会える可能性が高い）場合には、それは最大の不幸を齎す原因になったりするわけだが、文学作品の中では不幸にならないかわりに奇妙な開放感を覚えたりする。結局、ひとは、少なくとも僕は、「突き抜けている」人間の「なにもそこまで」的行動がうらやましかったりするのである。

（文学部 国際言語・文化学科准教授）



# 大学の歴史を調べていく中で

吉岡 義信

私が別府大学の歴史を調べ始めたきっかけは、附属図書館に勤務している時に「プランゲ文庫」の存在を知り、その中に「別府女専新聞」を見つけたことでした。勿論大学には所蔵されておらず、マイクロフィルムを所蔵している国立国会図書館からコピーを取り寄せ、調べていくうちに大学の新しい歴史がわかってきました。

プランゲ文庫は、連合国軍総司令部（GHQ）が占領政策の一環として1945年9月から1949年11月まで、検閲のために全国で発行された雑誌などありとあらゆる出版物を強制的に提出させ、これらの資料の全てはGHQの中の民事検閲局（CCD）に保管していました。GHQ参謀第二部戦史室主任歴史課長であったプランゲ（Gordon W. Prange）博士は、これらの歴史的資料価値に注目し、自分の勤務先であったアメリカのメリーランド大学への移譲に尽力した結果保管されることになり、1978年「プランゲ文庫」と称されるようになったものです。その後、資料の劣化に伴いメリーランド大学と国立国会図書館が協力してマイクロ化が始まり、これをもとに早稲田大学20世紀メディア研究所、占領期メディアデータベース化プロジェクト委員会がデータベース化、全雑誌1,964,933レコード、地方有力新聞1,261,280レコードを収録、これが現在「20世紀メディア情報データベース占領期の雑誌・新聞情報 1945 - 1949」として公開されています。この新聞データベース（記事・広告）の中に『大分合同新聞』も含まれており、この期間のことを調べるには重要な情報源となっています。

しかし、1949年12月以降を調べるとなると別の手段が必要となります。大分県立図書館が『大分合同新聞』とその前身である『大分新聞』、『豊州新聞』の大分県関係記事の見出しデータベースを作成しており、「大分合同新聞記事見出し検索」としてホームページから誰でも検索できるようになっています。1918年1月から1961年12月まではマイクロフィルムと新聞画像データベースで、1962年1月以降はマイクロフィルムで（この内1975年以降は原紙でも）見ることが出来ます。索引は1986年8月以降の記事約34万件を対象に作成されており、この中で別府大学に関係するものを抽出した結果、「別府大学」「別府大」「別大」をキーワードに検索したものが1,391件見つかりました。また、1986年8月以前7万件のうち該当するものは55件でした。この検索は見出しのみであるため、本文あるいは広告等に大学の関連記事がある場合は探し出すことができません。そこで実際にマイクロフィルムと画像データベースを見ることにし、休日のほとんどを半日かけて県立図書館に通い調べています。

ところで同様なことを過去にもしていた人がいたようです。偶然に『別府大学通信アルゴノート』を見る機会があり、そのNo.6（1966年）開学20周年特集号に「卒業生をつづる 別大20年史、資料集めはじめる」と題した記事があり、その中で合同新聞に取材されている限りのものを整理して見ることになり、丸山、田口、古庄というメンバーで新聞社整理部へ出かけスクラップブックの山の中から大体のものは取り終えたということが掲載されていました。これまで様々な資料に触れる機会がありましたが、この20年史が刊行された形跡は無いようです。ちなみに3名は丸山幸子（附属高等学校教諭 別府女専昭24卒）、田口幹治（附属高等学校教諭 別府大昭34卒）、古庄ゆき子（別府大学講師 別府女子大昭28卒）である。（肩書はいずれも当時）

昨年未までに1945年から1955年まで調べ終え大学に関するものは207件見つかりました。新聞画像データベース

は鮮明で見やすくページをめくる様に閲覧できるのですが、1日分見終えたら最初の画面に戻す作業に時間がかかるし、マイクロフィルムにあるものが無いという欠点もあります。また印刷した場合画面全体が暗くなり特に写真などは写りが悪くなります。マイクロフィルムは印刷画面もわりと鮮明で写真も判別がつきやすく、巻き戻しにもさほど時間はかかりません。しかし、流して見ていくので見落としが出る可能性もあり、またポシのフィルムは文字が白ぬきで見にくい欠点があります。画像データベース、マイクロフィルムそれぞれに一長一短がありますが、207件の中にはこれまで知られていない（私が知らないだけかも）事実や当時の教員の書いたものなどがあり、例えば次のようなものがあります。

別府女学院の開校式・入学式は1946年5月15日であった（大学の年譜では5月1日となっている）

1948年には別府市が別府女子専門学校を買収するという話があった

1953年3月別府女子大学内東九州上代文化研究所が教育委員会等と主催で「郷土古代文化展」を開催、連日盛況であった

1954年1月土屋工講師が大麦における低三倍体（みのらぬ大麦）の試作に成功、世界の植物学会で大麦の品種改良に貢献する原理として注目されていたこと、さらに翌55年には基本数をはるかにオーバーする染色体を持つ大麦の細胞を発見、日本遺伝子学会に発表予定とある。

1955年4月六勝園の上代博物館に併設して日本初の温泉博物館の建設計画があった

同年6月二宮淳一郎講師が日本で初めてメタセコイア（生きた化石植物）の種子からの栽培に成功した

同年10月川島つゆ教授が芭蕉臨終の図の拓本（刻まれた墓石は東京空襲で破壊）を発表した

この中で学生の時に「生物学」の講義を受講し、勤務してからも公私にわたりお世話になった二宮先生のメタセコイアの記事に触れてみたいと思います。

この種子は先生の先輩である中国長春の東北師範大学教授の竹内亮（タカチ マチ 1894-1982 植物学者）氏より送られたもので、60粒のうち1つが生育し始め、先生は研究成果を「Metasequoia 幼植物の生育と若干の形質（予報）」として『別府大学紀要』第6輯（1955.12）に発表しています。またメタセコイアに関することは学生サークル科学絵本研究会が出した冊子『私たちの本 2億年の生命との出会い』（1979）、図書館報『アルゴノート』No.25（1988 Spring）の「わが青春の別大通り」、『別府大学通信』第37号（1990.4）の「日中交流 三十八年」の中で先生が触れています。これらの文章を読んでみると、単にメタセコイアの発芽のことだけにとどまらず、前年の1954年秋、中国解放後の書籍や画報を集め大学祭で中国展を盛大に行い、その資料の大半は竹内氏が送ってくれたものであること、55年暮れに中国科学院長郭沫若氏が別府を訪れた際に、別府駅に出迎えたのが本学学生の代表であり、その時歌った友好の歌声が郭氏の顔を綻ばせたこと、また発芽の快挙が氏を殊の外よろこばせ日中友好を謳った五律詩を贈られたことなど、別府大学と中国科学界の交流がこの頃すでに始まっていたと記されている。このメタセコイアはその後どうなったか、何かの折に二宮先生が附属高校にあると言われた記憶があるので、探してみたがそれらしき樹木は見つからなかった。もしいずれかの時点で伐採されたとすれば、大学の歴史の1頁を物語るものが失われたことに寂しさを感じるのは私だけであろうか。

（学生事務部次長）

## わが著書を語る

『新「関ヶ原合戦」論  
一定説を覆す史上最大の  
戦いの真実―』

新人物往来社  
2011年3月22日発行  
定価 1,400円  
191頁

文学部史学・文化財学科

白 峰 旬



『国民会計と企業会計』

創成社  
2012年12月25日発行  
定価 2,310円  
166頁

国際経営学部

矢 澤 信 雄



関ヶ原の戦いは、周知のように、前近代において最大規模の会戦であり、その後の政治体制を規定した戦いであった。高校の日本史教科書でも、石田三成などがこの戦いに負けた結果、徳川家康の全国に対する支配権が確立することになった、と記載されている。

この有名な関ヶ原の戦いに関して、本書では通説に対する再検討という趣旨から、第1章では、関ヶ原の戦いへの経過に関して再検討し、第2章では、家康による上杉討伐の原因になったと言われている有名な「直江状」の内容解釈をおこない、第3章では、従来、西軍としてとらえられてきた実態を石田・毛利連合政権としてとらえ直し、第4章では、石田三成の軍事戦略と戦後構想を具体的に検討し、第5章では、関ヶ原の決戦当日の状況と敗因論を述べた。

これまでの関ヶ原の戦いに関する通説は、明治26年(1893)に刊行された参謀本部編纂『日本戦史 関原役』の記載内容をもとにしている。この『日本戦史 関原役』は、江戸時代の軍記物などを史料の根拠にしていることから、現在では再検討が必要な箇所が多いのである。そうした視点から、本書では、徳川家康が勝つべくして勝った戦いという従来の考え方を一新して、これまで説かれてきたような東軍VS西軍というような同格の軍による戦いではなく、石田三成と毛利輝元が政治的正統性(豊臣秀吉の後継者である豊臣秀頼を推戴)を有した公儀軍であり、それに対して、徳川家康が率いた軍はその公儀(豊臣公儀)から排除された正統性がない軍であると規定した。

そして、石田・毛利連合政権として規定した論拠として、(1) 豊臣秀頼を直接推戴した、(2) 毛利輝元が公儀の城郭である大坂城(豊臣政権の本拠地)に入城した、(3) 自ら「公儀」と称した、(4) 大名改易を実施した、(5) 大名に対して知行宛行権を行使した、などの諸点を提示した。このことは、従来の政治史では全く指摘されてこなかった点であるが、このことを指摘したことにより、家康がこの時点で公儀から排除されていたことを明確にすることができた。

結論としては、マクロな視点から、惣無事体制(惣無事令は藤木久志氏の学説による)の崩壊から二重公儀体制(二重公儀論は笠谷和比古氏の学説による)の成立へという歴史的推移としてとらえた。

今後も著者は、こうした視点から関ヶ原の戦いをとらえ直して考察していきたいと考えている。

著者紹介

白峰 旬 (SHIRAMINE Jun)  
別府大学文学部史学・文化財学科教授

本書は私が2012年12月に出版した論文集である。全体は6章からなっており、各章を貫く問題意識としては「21世紀に経済活動を行う主体が避けて通れない課題は何か」というものである。結果として特に、環境、CSR(企業の社会的責任)、リスクの3つの概念が会計学にどのように関係してくるかに焦点を絞ることになった。

第1章では環境報告書の現状と課題について調査分析を行った。日本企業は環境問題への取り組みに熱心であり、多くの企業が毎年、環境に係わる自社の取り組みを紹介した報告書を公開している。これらの報告書を分析し、企業が環境問題の解決にどのような形で貢献することが可能であるかを検討した。その分析を踏まえ、第2章ではCSR報告書の現状と課題について調査分析を行った。

第3章では環境会計を横軸に財務会計、管理会計の2つをとり、縦軸に企業(ミクロ)会計、国民(マクロ)会計の2つをとり、合計で $2 \times 2 = 4$ 種類に環境会計全体が分類できるというアイデアを提示し、特にマクロ環境会計の最先端の研究成果について考察をおこなった。

第4章では本書の中心課題である企業会計と国民会計の統合化について分析をおこなった。一国を構成する経済主体が行う経済活動を会計の視点から統合的に表現したものが国民会計である。一国を構成する経済主体はほとんどが企業からなっていることを考慮すると、企業活動を会計の視点から表現した企業会計を全企業について連結すれば、国民会計ができるのではないかとこの着想のもとに本章では分析を進めた。

第5章では福島原発事故の経験を踏まえ、リスクを扱う金融工学と会計学が資本コストの概念で連結していることを示した。最終章においては会計学におけるリスクコストの概念を提示し、①国際機関、②日本政府、③民間の3つの立場のアクターが今回の事故についてどのような見解を表明しているのかに関し文献調査をおこなった。

なお、本書は文部科学省科学研究費助成事業基盤研究(C)「社会の持続的成長とライフサイクルコストニング—欧米諸国と日本との比較において—」(課題番号 23530616)による研究成果の一部をなしており、最終成果は2014年度に発表する予定である。

著者紹介

矢澤 信雄 (YAZAWA Nobuo)  
別府大学国際経営学部国際経営学科教授